新発見の遠州浜松城図を読む

浜松市文化財課　鈴木一有

１　浜松城の概要

本発表は、2020 年に新たに発見された「遠州浜松城図」（図１～３）について、その特徴について整理し、資料の評価を行うものである。絵図の詳細を紹介するにあたり、まずは、浜松城について概要を示しておこう。

浜松城は静岡県浜松市中区元城町とその周辺に構築された戦国時代から江戸時代にかけて機能した城郭である。天竜川の西側に広がる三方原台地の東縁にあたる段丘を利用した平山城で、古くは引間（ひくま）城と呼ばれた。浜松城と改名されたのは元亀元年（1570）、徳川家康の拠点移動後のことであり、その城下町は現在の都市「浜松」の基礎となっている。

浜松城の中心部（本丸の一部と天守曲輪（てんしゅくるわ）を中心とした区域）は、浜松市の史跡に指定されており、浜松城公園として一般に開放されている。市指定史跡の範囲には野面積（のづらづみ）の石垣が残り、天守曲輪内には、昭和 33 年（1958）に再建された鉄筋コンクリート造の復興天守閣と、平成 26 年（2014）に再建された木造の天守門が並び立つ。

こうした公園として整備され、見学できる範囲は浜松城の領域全体の１割程度に過ぎない。かつての浜松城は、広大な面積を誇っていた。浜松城は天守曲輪を最高所とし、その脇に本丸、二の丸と西から東に向けて雛壇のように施設が配置されている。二の丸の北東部には前身城郭である引間城（江戸時代には「古城」とされる）を取り込み、その南側には三の丸が構築されている。江戸時代に完成した最終的な範囲は、東西 600m、南北 700mに及ぶ（図４）。現在、三の丸の殆どは民有地であり、商業ビルなどが建て込んでいる。

浜松城は徳川家康が築城した城として著名であるが、その前後の時代においても、それぞれ特徴的な姿がみいだせる。畿内と東国を結ぶ戦略上の重要性は高く、浜松城の攻防や城主配置に関わった武将も、今川義元、徳川家康、武田信玄、豊臣秀吉と日本史上の重要人物が名を連ねている。その推移を、時代や城主の違いから整理すると、①戦国時代前半（今川氏領有期もしくはそれ以前、15 世紀後半～1569）、②戦国時代後半（徳川家康領有期、1570～1590）、③安土桃山時代（堀尾氏領有期、1590～1600、註２）、④江戸時代（譜代大名領有期、1603～1868）、⑤近代（1868～1945）、⑥現代（1945～現在）の６段階に分けることが可能である。

表１　浜松城の段階区分と都市の変遷

段　階	時　代	西　暦	主な城主	城の特徴	都市のありさま
第１段階	戦国時代前半	1470 頃～1570	飯尾連龍	引馬城	引馬宿
第２段階	戦国時代後半	1570～1590	徳川家康	浜松城と改名	浜松城下町の形成
第３段階	安土桃山時代	1590～1600	堀尾吉晴	高石垣と天守の構築	東西軸の顕著化
第４段階	江戸時代	1603～1868	譜代大名	三の丸の拡張	引馬宿解体、東海道付替
第５段階	明治～昭和（戦中）	1868～1945	―	民有地化	東海道線の開通
第６段階	昭和（戦後）～現代	1945～現在	―	公園、史跡整備	戦後復興の街路、区画整理

２　遠州浜松城図の特徴

遠州浜松城図は、東を上に描かれており（資料では北を上にして提示）、縦 63.0cm、横 69.0cm であある。2020 年に市民からの寄贈を受けたものであるが、詳しい来歴は不明確である。

遺存状態は良好であり、浜松城の特徴をよく捉えている。全体には、矩形を意識して縄張りが表現されており、形式化したものである。遺存状態が良好なことに加え、形式化した表現から、本図は何らかの原図から写された複製品であるとみられる。原図については詳細不明と言わざるを得ないが、17 世紀後半に描かれたとみられる「遠州浜松城絵図」に先行するとみられる特徴が見出せ、現状では浜松城の旧状を知ることができる最古の情報を伝えている可能性が高い。

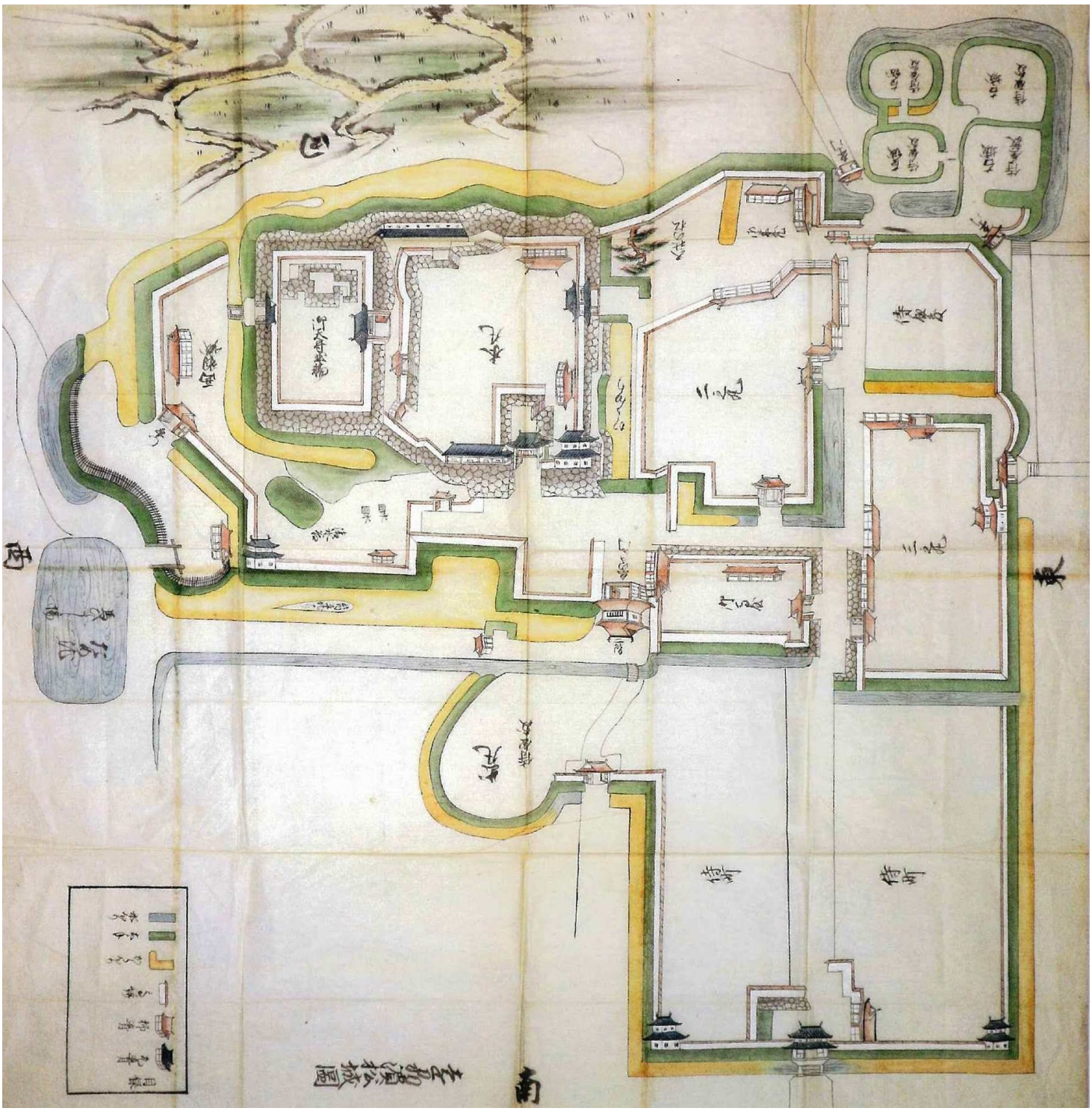

図１　遠州浜松城図

本図において注目できる特徴を列記しておこう。

①柿葺（こけらぶき）の建物が多く描かれる（柿葺の榎門は従来知られていなかった）。

②榎門が一際大きく描かれ、その向きが逆である（通常は中心方向を上に描く）。

（榎門がかつての大手門であった可能性を示唆【史料１・２】）

③今までに知られていな２階建ての櫓が表現されている（瓦門南、大手東隅など）。

④富士見櫓がなく、多門櫓が描かれている。

⑤本丸西側土塁に土塀が表現され、天守曲輪に至る門（２箇所）が描かれている。

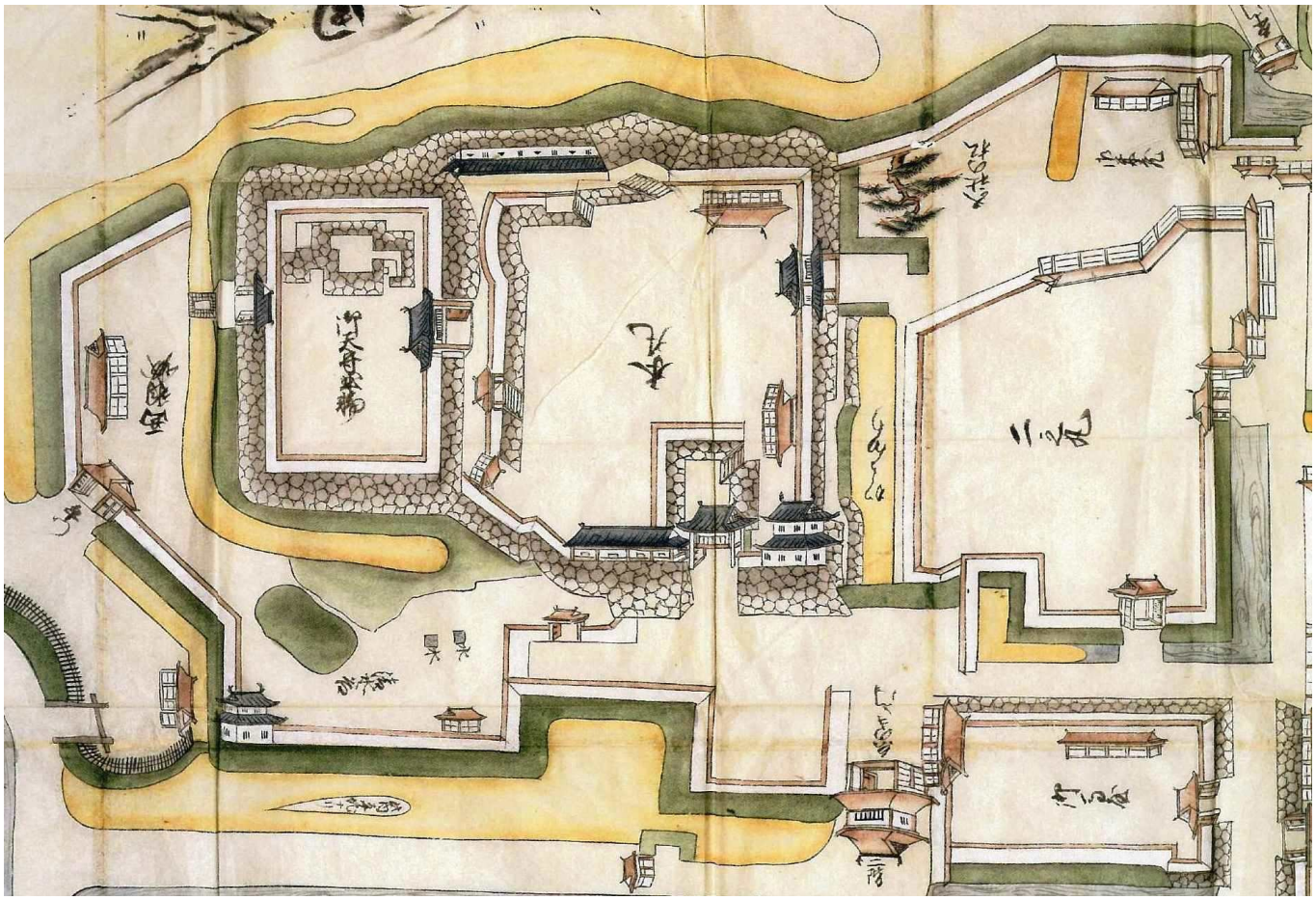

図２　遠州浜松城図詳細（城内中枢）

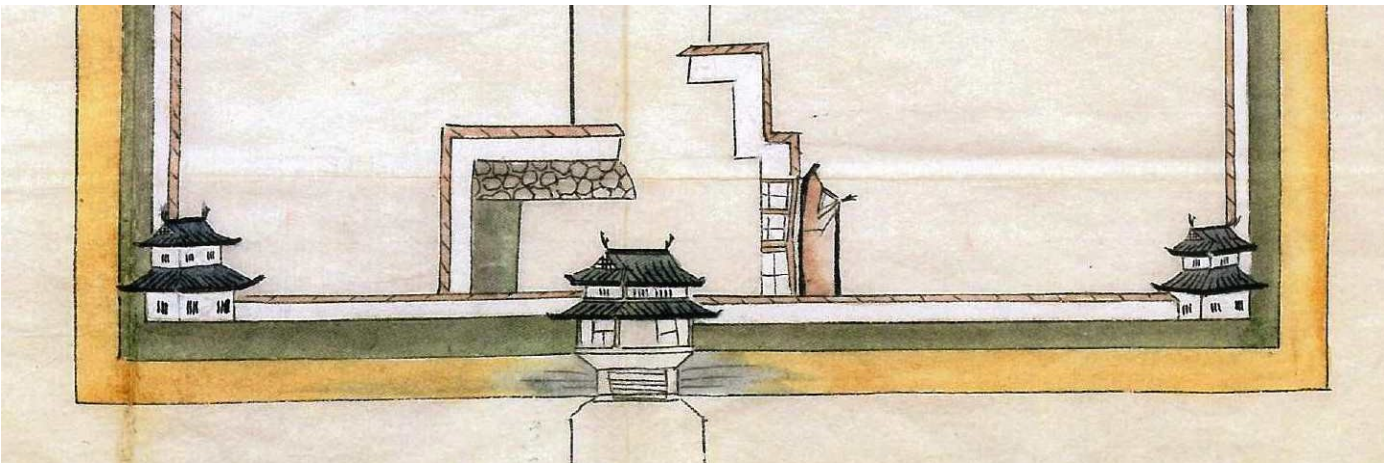

図３　遠州浜松城図詳細（大手門周辺）

3　絵図の変遷

浜松城を描いた絵図は 17 世紀から 19 世紀までの各時期にわたる。それぞれ、描かれた経緯が異なるため、一律に比較することが難しいが、城内施設に大きな変化はない。ただし、建物や塀などの屋根に注目すると、柿葺きや板葺きなどから瓦葺きに変更されていく様子が看取できる。発掘調査の成果においても、土塀に用いたとみられる平瓦が江戸期でも比較的新しい時期（19 世紀以降か）に登場しており、絵図からうかがえる状況と整合的である。

浜松城における発掘調査の成果は年々増加傾向にあり、絵図や史料によってうかがえる情報と合わせ、総合的に浜松城の変遷を跡付けることが可能になっている。

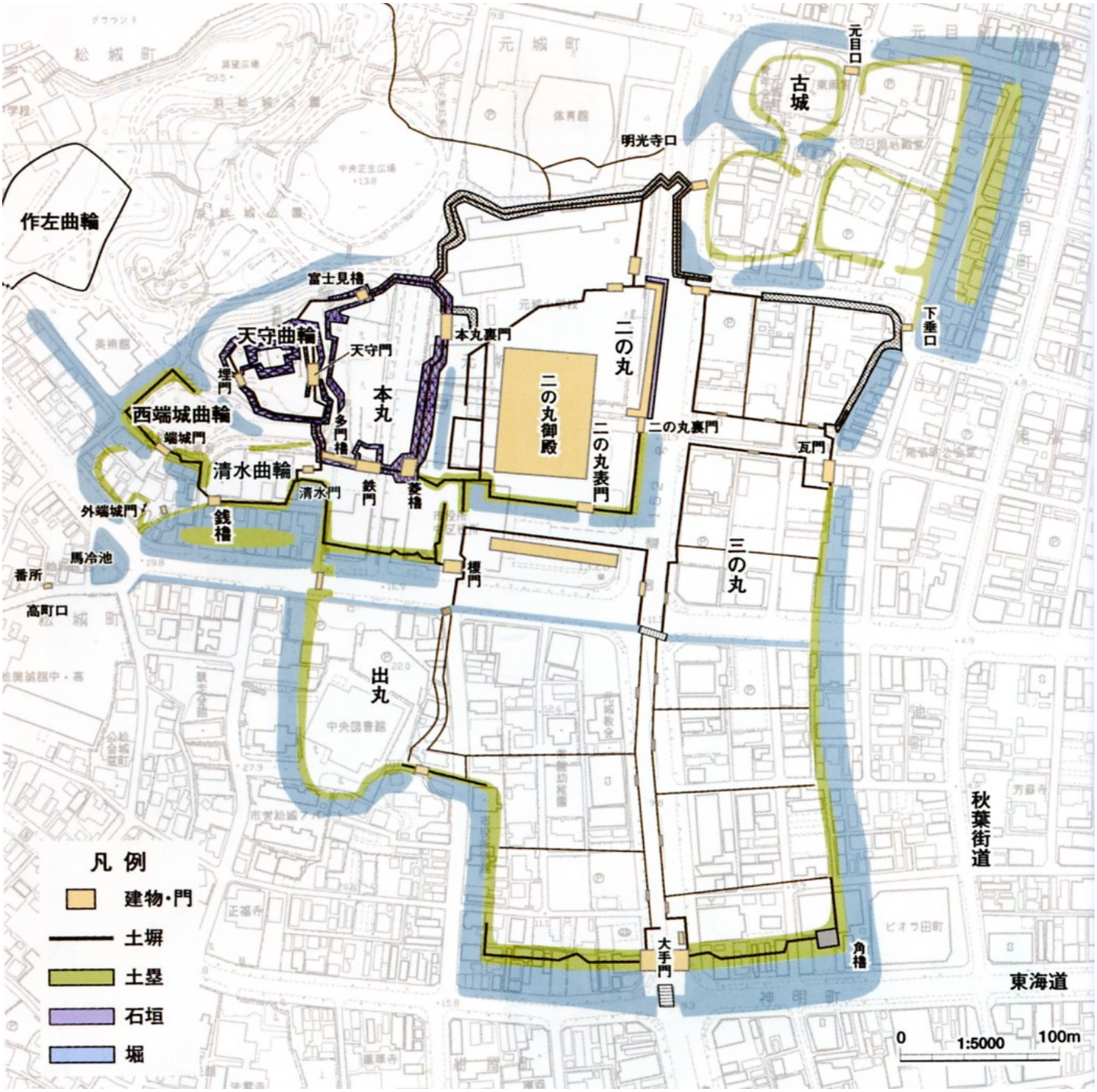

図４　浜松城の復元図（江戸期）

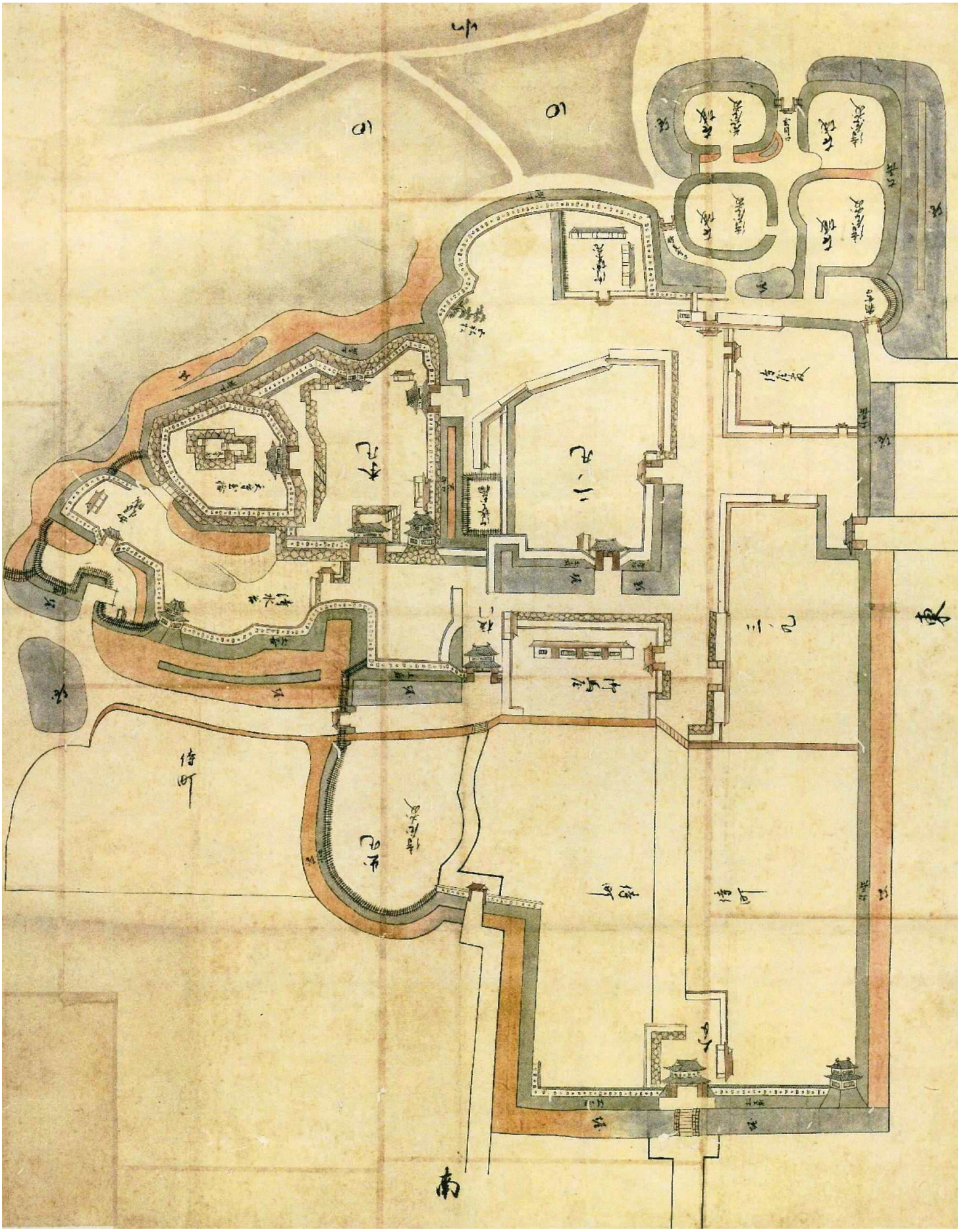

図５　遠州浜松城絵図（17 世紀後半か）

図６　青山家御家中配列図（17 世紀後半）

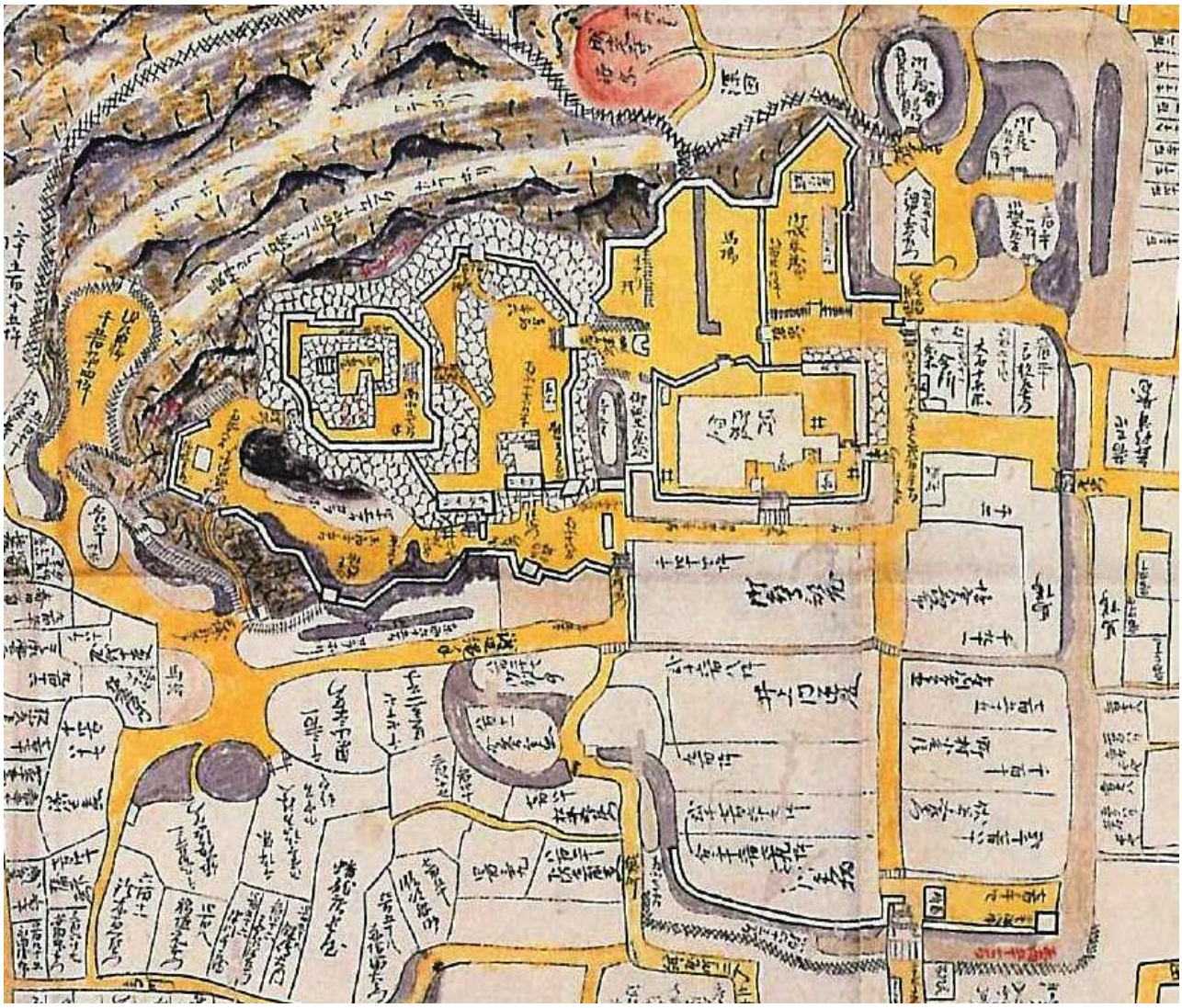

図７　遠州浜松城下絵図（18 世紀後半）

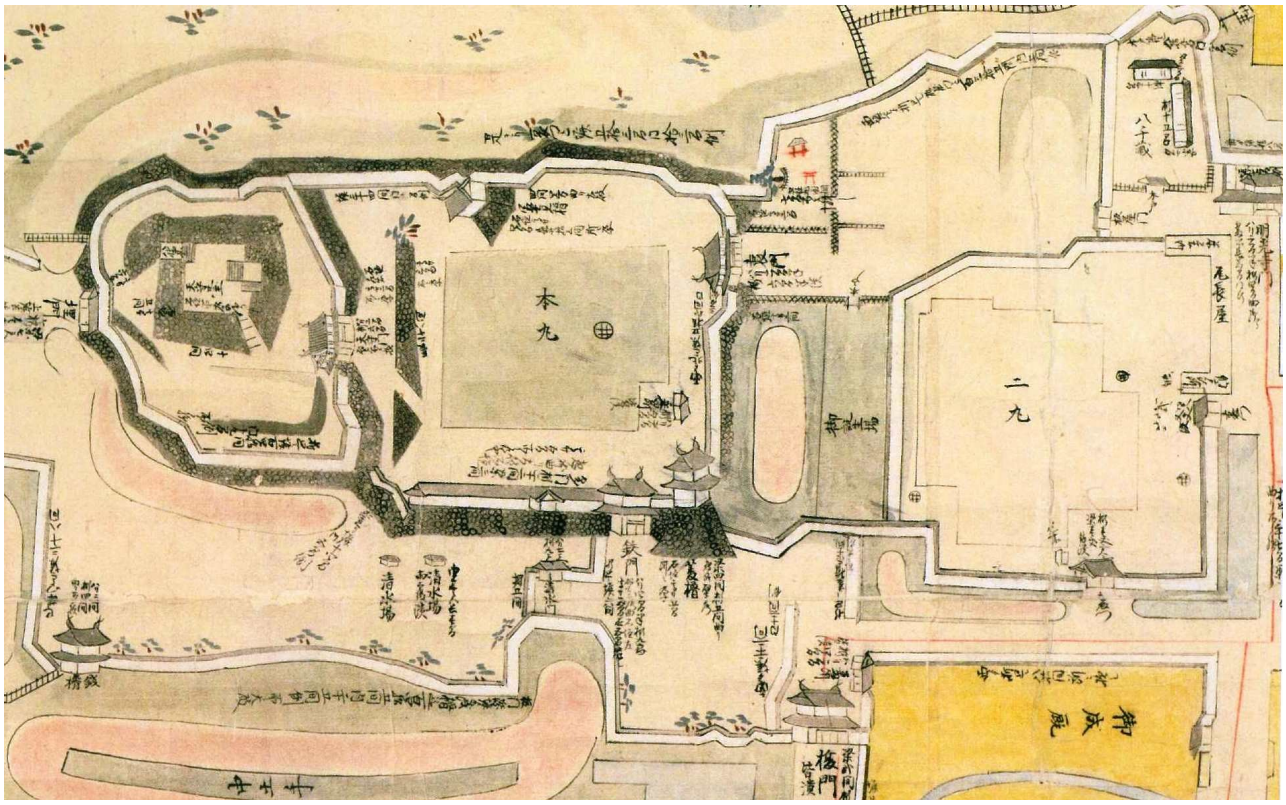

図８　安政元年浜松城絵図（19 世紀後半（1858））

図９　堀尾氏領有期の浜松城復元図（東から）

又彌藏をも射殺す、城兵吋はず郭外に火を放つ、櫻井庄之助勝次城兵を討、城門に かゝりし指物を取返す等の事ありと、

天正三年、德川公大久保治右衛門忠佐をして蜷原に置き、光明城を攻めしむ、城主朝比奈又太郎降參し、甲斐國に奔る、六月二十四日なり、先陣本田平八郎忠勝、榊原式部太夫康政、毘沙門堂に屯す、同年十二月二十三日合戰し城兵討たる、城主信蕃甲斐國に奔り去る、同年大久保忠世侯城主と爲る、同七年己卯九月十五日源信康公此の城に於て生害す、

三河記卷七に清瀧寺地下の庭云々と、同記卷六に武田の家人依田左衛門佐信蕃、蘆田右衛門尉幸兵粮盡て天正三年十二月二十三日二俣城を相渡し、依田蘆田甲州に歸る、城は勳功の賞として大久保忠世に賜ふと、

同八年城主忠世侯小用原に移つて後ち古城と爲る、武鑑には天正十八年、古老曰く「天正八年八月朔日城墮つ、之に仍つて村中八朔を祝はず」と、又曰く、城門を墮して濱松城に移す、恵乃木門と號する是れなり、

史料２　遠江国風土記伝

看町御由緒之次第

一、看町人足役御由緒御座候ニ付、寛永之頃ゟ相勤申候、田町・旅籠町ハ元和增御傳馬之時分ゟ被仰付、看町同前ニ三町ニ而人足役相勤申候、

看町御由緒と申候ハ、永祿天正之時代、

御所様當地御在城之時分、魚店を榎御門之近所御座候、其節ハ御城者只今古城御場所ニ御座候、御城近所ニ付看御用ハ格別外御用ニも人足御入用之時分ハ折々御使、後ニハ家業之妨と成申候故御願申上候、家業取込申時分外御用ニ而人足御使致迷惑、然共御用と御座候ハ終ニ御用滯り不申候、何とぞ助力成義被仰付候ハ、、夫れを致助力と何方ニも御用奉相勤度申上候、何事ニても見立願申候様被仰付候ニ付、書付を願上候ハ、幸魚商賣仕候得者御領分海川看外賣不致看町へ計賣拂、町在市町迄干看等町在賣共ニ看町ゟ賣申候様ニ被仰付候ハヽ助成ニ相成可申候間、此通被仰付候ハ、難有奉存候と申上候ハ、願之通被仰付、尤小性之もの賣申候ハハ看町之ものと致相對、町在市町へも振賣仕候、右之外御由

史料１　看町御由緒之次第